

IV 特記事項

特記事項－1 新キャンパスへの移転・新校舎建築工事の着手と本体の完成

平成 21 (2009) 年 4 月、新キャンパス住所地・弘前市清原 1 丁目 1-16 で、新校舎の建築工事を開始し、平成 21 (2009) 年度末までには、校舎本体がほぼ完成した。本報告書提出の時点では、校舎全体の完工、内部新設備の搬入及び外構工事も終わり引き渡し手続きを残すのみとなっている。本編、基準 9. 教育研究環境の項では、当然のことながら、平成 21 (2009) 年度の状況について記述し、改善・向上方策 (将来計画) として、新キャンパスについて触れられている。

本学は設立以来、40 年を経て、新キャンパスへの移転が実現することになり、8 月からは、充実した新たな環境で学園生活が展開されるが、特に、キャンパス空間の拡張、校舎等の拡充及び施設設備の飛躍的改善が実現されるので、特徴的事項を列記しておく。

なお、現在の施設設備はすべて設置基準に適合しているものであることを付記しておく。

- 1) 校舎敷地の拡充 現在の 16,997 m² (基準は 4,000 m²) から 41,838 m² の 2.46 倍の広々としたキャンパスとなる。
- 2) 校舎の拡充 現在の 6,713 m² (基準は 4,958 m²) から 11,567 m² の 1.72 倍に拡大し諸施設・設備が充実される。
- 3) 管理運営関連施設 事務室、学務・学生課の面積は現在の 1.6 倍にあたる 267.3 m² となり機能的改善も図っている。
- 4) 教員研究室の完備 個人用研究室 (24 m²~27 m²) 35 室を完備。
- 5) 講義室等の充実改善 普通講義室 1, 集団実習室 (マイクロテーピング等) 1 を増設し、全講義室にプロジェクター、スクリーン等を整備。
- 6) 実験実習、特別室等の拡充 視聴覚室の改善整備：現代的機器類の整備と集中制御方式の採用。各種の実験・実習室の充実整備：調理実習室・HACCP (ハサップ) 設備等最新器具の充実。被服実習室・資料作品室等の拡充。コンピュータ実習室を 1 室から 2 室に増設。教育方法・教材開発実験室の新設等。
- 7) 学生が自由に使用できる卒論用学生実験室 2、学生実習室 2 及び学生ゼミ室 2 の計 6 室を新設。
- 8) 体育館 現在の 1.48 倍にあたる 1,364 m² に拡充し、館環境及びステージ等の整備。
- 9) 多目的ホール 現在の 2.51 倍にあたる 647 m² にし、ステージ、大型スクリーン、プロジェクター等を備え 440 人を収容できる施設として整備。
- 10) 図書館の現代化整備 現在の 2.27 倍にあたる 559 m² にし、閲覧座席数も 40 席から 79 席に倍増するとともに最新の図書管理システムの導入により、利用学生の便宜を図る等の改善。
- 11) 学友会室、文化部室、体育部室等の整備及び礼法室 (茶室、生け花室兼用) の新設。
- 12) 学生ホール (1F) の拡張及び談話コーナー (6ヶ所：2F~5F)、談話室 (1ヶ所：3F) を新設し、現在の学生ホール 125.4 m² に対して合計で、299.7 m² の 2.4 倍弱に拡充整備。

以上の事項及び校舎周辺の緑地化整備等も進めており、教育研究・生活環境全体のアメニティの飛躍的改善を図っている。

特記事項－２ 青森県の事業とタイアップした食育啓発活動

本学は栄養士養成施設として、家政学科では栄養士の養成と同時に、教職課程の認定をも受けているので、栄養教諭及び家庭科教諭等の資質向上を目指した幅広い教育を展開・推進している。近年では、食環境・栄養環境の変化・多様化がみられるが、その負の側面としての生活習慣病などが増加傾向にある。それらの予防処置として食育啓発活動の重要性が指摘されている。したがって、本学ではすでに「栄養指導実習Ⅱ」で食育啓発に関する教育と実習（体験）を行ってきた。

青森県においても、平成 18(2006)年に「青森県食育推進計画」を策定し、豊かな県産農林水産物を活用した健康な食生活、恵まれた自然環境の中での農林漁業体験、そして先人の知恵が育んだ食文化の伝承など、青森県らしさを生かした食育を、県と県民との協働による「いただきます！あおもり食育県民運動」として展開してきた。今後、この運動をさらに発展させるため、県内の大学に食育啓発活動を委託し、近い将来、社会や家庭において食育を実践する立場になる大学生に、県民を対象とした直接的な啓発活動を実践させること等をとおして、未来の本県を担う食育指導者を育成するとともに、大学教員等による食育指導者の資質向上に向けた支援を行うこととなった。

表IV-2-1 平成 21 年度の実施状況

実施日	実施場所	対象
8 月 3 日～4 日	弘前総合保健センター	親子 15 組(30 人)、2 日で 60 人
8 月 19 日	アリス保育園	3 歳～5 歳児 63 人
12 月 1 日	平川市立金田小学校	全校児童 318 人
2 月 17 日	リンゴベビーホーム	3 歳児 20 人
2 月 17 日	花園保育園	3 歳～6 歳 70 人
3 月 3 日	草薙小学校（すその保育園）	全校児童 38 人（13 人）
3 月 5 日	文化幼稚園	3 歳～6 歳
3 月 8 日	養生幼稚園	3 歳～6 歳

そこで本学は、社会への貢献活動と栄養士及び栄養教諭の資質向上を図るために、この食育啓発活動委託事業に積極的に協力することにした。委託期間は平成 21(2009)年及び平成 22(2010)年度で、一年毎更新の二年間である。主に県が訪問先の募集と取りまとめをし、その中から内容と実施日時が合えば活動をする形態をとっている。平成 21(2009)年度は表 IV-2-1 が示すように 8 回の活動を行った。いずれも、食育についての寸劇やペープサートを通しての啓発活動であり、家政学科 4 年および 3 年生で、栄養士課程を履修している学生達がこの活動に参加してきた。学生は参加することに積極的であり、この活動の意義の重要性及び活動の大変さや楽しさと同時に、感謝し感謝されることの大切さをも理解す

ることができたこと、さらには、実社会との触れ合い体験が栄養士養成教育に役立つことが多かったこと等は高く評価される。

特記事項－3 夏期公開講座での食育推進活動

本年は、この活動の他に、本学で定期的開催している夏期公開講座において、一般人を対象に食品加工・調理実習を含む食育推進の講座を開講するとともに、学園祭中に現在及び将来の食育指導者や栄養教諭を対象に、「家庭につなげる学校の食育」と題する特別講演会を実施して好評を得ている。

特記事項－4 教員採用推薦特別枠が12人に増加

本学卒業生の仕事ぶりや教員採用試験の結果が評価され、教員採用試験の一次試験が免除になる大学推薦特別枠（小学校教員のみ）を、関東の都県を中心に12人もらっている。平成19(2007)年以来、特別枠の人数が次に示す表のように増加している。ちなみに平成21(2009)年に、関東3県の小学校教員採用試験を受験した学生は21人で、そのうち15人(71.4%)が教諭・本採用になっている。

表IV-4-1 大学推薦特別枠の推移

	神奈川県	東京都	千葉県	埼玉県	横浜市	さいたま市	京都市
平成19年度	1(8)	—	0(1)	—	—	—	—
平成20年度	1(8)	—	1(1)	—	—	—	—
平成21年度	2(11)	—	2(3)	1(0)	—	—	—
平成22年度	2(9)	—	2(5)	1(1)	—	—	—
平成23年度	4	2	2	1	1	1	1

()内は本採用の人数

特記事項－5 実践力の育成を目指す特色ある初等教員養成カリキュラム

実践力の高い教員、保育士養成を目指して、児童学科では、幼稚園、小学校教員及び保育士養成の3教職課程を設定し、以下に示す特色ある教育を展開している。

小学校課程では、「教育実践の方法」「表現技術（音図体）の熟達」などの学習を主要課題としておさえ、基盤としての教育学、教科教育学を始め、授業全体をを少人数指導体制で実施し、重点的積み重ね学習で能力開発を徹底し、専門的知性に裏付けられた実践力と信頼性の高い小学校教員の育成を図っている。

幼稚園、保育士課程では、乳幼児・児童学等全般にわたる知的理解と高度な教育技術についての並行学習を行うことによって、乳幼児教育のスペシャリスト育成を目指している。本課程でも、専門知性教育力と情操教育面での実践力を身に付けることを重視している。

前記目標実現のために、幼・小・保育士課程では、1年次よりピアノ演奏力、読譜力の習熟時間を設定し、複数の指導者による小クラス教育で、基礎力及び専門的能力をより高められるように配慮している。また、算数、理科等についても興味関心を高め、「知る」喜

びを体験できる実験の重視と柔軟な科目選択もできるようにしている。

2年次には、授業科目「教職の理解」を設定し、卒業生現職教員の現場体験、管理職者の活動状況などの講義によって、早期に教職への学習意欲を高め、望ましい教師像のイメージを描けるようにしている。また、幼稚園課程では、本学園の幼稚園で、日常保育のサポートタイムを設定し、現実保育の観察、幼児との交流体験を行い、3年次実習に備えている。

3年次の幼稚園教育実習は、市内に指定協力幼稚園を設定し、きめ細かな実習効果を上げている。他方、学生の希望で、県内外のその他の幼稚園でも実習を行っているが、実習園には、大学から巡回指導教員を派遣して、その実状や教育活動の具体的課題等について情報交換を行い、次年度以降の指導改善に生かしている。

なお、3年次学生は、学友会を中心とした体育大会・学園祭等々の各種の全学的行事の中心的な存在として、主体的に企画立案、運営等にあたり、全学生の参加協力を引き出し、行事を成功に導いている。この過程で育まれる課題解決力、情熱、団結心などは、将来、教師または組織リーダー、あるいはフォロワー等として活動していく能力形成に大きな役割を果たしているもので、実践力形成の方法論からしても欠かせないものとなっている。

4年次においては、18日間の小学校教育実習の事前事後指導の中で“実習の心構え”の一つとして、各実習校の校長、教頭、教務主任、学級担任、技能主事等、直接・間接に指導にあたった教職員へ、実習で得た具体的体験を記したお礼状（ハガキ）を出すことによって、感謝の気持ちを表わす人間としての大切な習慣を身に付けさせている。

実習受け入れ協力校として、大学周辺の市立小学校10数校に依頼し、全実習生を配属しているので、管轄教育委員会に事前事後の報告等を行い、緊密な連携関係の中できめ細かな指導を行っている。

実習終了後も学生は、当該実習校の遠足・学習発表会等の行事に参加して、児童の成長や学校現場の日常活動を観察しながらサポーターとしての体験（週1回）を積むようにもしている。また、学生自ら全実習の流れや研究授業等を総括する反省録を作成し、3年生も全員参加させる反省会を実施している。同時に実習校及び県・市教育委員会との懇談会を開き、効果的な教育実習を生み出す協議を行い、地域に根ざした教員養成を行っている。

なお、教職課程履修者の実習資格認定では単位修得状況に加え、態度、教職への意欲を評価し、欠点が多い場合は改善指導を行った後に実習ができるようにしている。

卒業研究は、論文と実技・演奏、作品発表など4単位を課して、専門職者になるための学識及び自発的研究力と自己教育能力を育む基本分野として重視し、一連の実践力を育てる特色ある教員養成カリキュラムの完結を図っている。

特記事項－6 実験、実習を重視した中学校、高等学校及び栄養教諭養成カリキュラム

中学・高校、栄養教諭課程では専門的知識の確実な習得のために、特に実験・実習科目を重視して広く開講している。1年次では基礎的技術を、2年次ではその応用展開による造る喜びの体得、栄養教諭課程の3年次では学内外の実習が本格的に開始される。4年次では各学校等での完成実習を行うことによって、体験に基づく実践的学習指導ができる教員養成を目指している。

特に、栄養教諭課程では、センター式給食と県内数校しか無い自校式給食の2種類の学

校での観察実習等を行い、実施形態の異なる実践的給食指導や食育教育の在り方を学習させている。

教育実習終了後は、3年次全学生を含めた実習反省会を行い、実習の成果や課題について発表し、意見交換等を行ううことにより、教員養成課程の学習総括を行うと同時に3年次学生に対する事前指導の機能をも果たさせている。

また、体験的に本質を深く理解し、同時に教員として必要とされる各般の能力を総合的に育成する方法として、プロジェクトメソッド的手法を用いた共同研究を10年以上に亘って継続的に行い、その成果を学園祭で発表してきた。

例えば、1年次より各テーマを設定させ、上級生の指導のもとに各テーマの具体化を企画させる。絹をテーマにした展示発表では、蚕を生育し繭を作ることから始まり、絹織物の作品の製作まで行わせる。同様にウールでは羊の刈りを行わせ、綿では綿花の育成を行わせるなど、素材研究から作品の製作まで一貫した作業を通して、それらについての理解を深めさせている。近年は、りんご、菊、茶など食品の効能やオリジナルレシピの開発なども手掛けている。一連のテーマは次に示す表の通りである

家政学科 年次共同研究テーマ内容 (歴史・素材研究から作品製作まで)	
年度	研究テーマと作品製作
平成10年	伝統模様による刺し子の研究・作品製作
平成11年	蚕の成育研究と絹による作品製作
平成12年	羊毛の刈取りと研究・毛織物による作品製作
平成13年	綿の栽培研究と綿を用いた作品製作
平成14年	裂織技法の研究と様々な布地(素材:タオル、綿、絹、毛)による作品製作 その1
平成15年	裂織技法の研究ととうもろこし素材による新しい技法の研究(透し織) その2
平成16年	植物染色における濃染処理剤の研究と作品製作
平成17年	“りんご”の種類と効能 りんご(木・花)の染色と作品製作および食品・調理オリジナルレシピの開発
平成18年	“菊”の歴史と効能 食品・調理オリジナルレシピの開発 菊をテーマに被服作品製作

平成 19 年	“茶”の歴史と効能 食品・調理オリジナルレシピの開発 茶を染料にした被服工芸作品製作	
平成 20 年	被服系	テーマ「日和～あたたかさを感じて～」による作品製作
	食物系	漬物の歴史や世界の漬物について
平成 21 年	被服系	テーマ「実～季節の香を感じて～」による作品製作
	食物系	ヨーグルトから作る乳酸菌飲料やカッテージチーズなどについて

特記事項－7 スクールサポーターによる体験学習

児童学科では、小学校教諭一種免許状取得者への支援として、スクールサポーターによる体験学習（学習指導の補助・課外活動の指導の補助・学校行事の手伝い・評価活動の補助・読み聞かせ・その他の活動）を通して、小学校教員・学級担任として必要なことを学び、教育実践の力量形成に役立っている。スクールサポーターは、平成 18(2006)年度から、小学校本採用の合格者支援を目的に実習校の協力のもとに始められた。大学の講義のない日・週一日、また講義の空き時間を利用し、4 年次後期に行っている。今後は、カリキュラム内の単位制教科として実施できるよう、市の教育委員会と教育実習協力校の連携のもとに制度化する方向で検討している。

特記事項－8 関東圏での教員採用者を中心としたネットワークシステムの構築

平成 16(2004)年頃から関東圏での教員採用者数が増加したことを機会に卒業生との年代を超えたネットワークづくりを強化している。

毎年 1～2 月に本学教員 3～4 人が、関東方面に出向き、卒業生が勤務している小学校や職場等を訪問すると同時に、卒業生との懇談会を開いて卒業生同士の情報交換、協力の場として、有効活用を期待して組織したものである。

この会合には毎年 40 人ほどの参加者が見られるが、卒業年次を越えて、お互いが身近な良き相談相手となり、嬉しいこと、楽しいこと、また苦しいことなど様々な話題を提供し、会食をともにしながら親睦と連携の絆を深めている。

このネットワークを通してのサポート機能は、特に新卒教員の不安解消や安心感につながっているものであるが、さらには、これから関東圏での就職を希望する在学学生や保護者にとっても心強い安心と励みとなっていることが高く評価される。

今後は年度別連絡員を決め、少なくとも夏期、冬期の 2 回実施を計画し、教員のみならず、企業就職者をも多数含めたネットワークづくりを強化していくことにしている。また、近い将来、この会をベースとして、同窓会関東支部の立ち上げも考えている。

特記事項－ 9 絵本読み聞かせボランティアへの参加

平成 20(2008)年より、青森県教育委員会の委嘱を受け、児童学科 3 年、4 年生を中心に「子ども読書活動の推進」活動に参加している。児童学科生は将来、幼稚園・小学校教員、または児童館職員等を希望しているため、特に読み聞かせや絵本に興味、関心が高い。これまで「読書推進県民大会」に 2 回、その他保育園、幼稚園そして図書館での活動にも積極的に参加し、子どもとのふれあいを通しながら、良質な絵本の紹介や興味づけ、絵本の持つ魅力等についても普及、啓発を行ってきた。この活動経験は、教員としての能力形成にも役立ち、確実に教員としての資質向上に繋がっている。

平成 20(2008)年度の県民大会では、地元テレビ局に「将来幼稚園、小学校の先生を目指す学生の運動」として取り上げられ、特集として放映されたが、このことがきっかけとなり、地元の小学校からも「絵本読み聞かせ」の依頼を受けるようになった。

特記事項－ 10 キンダーガルテン・サポーター

本学の幼稚園教育実習は、児童学科 3 年次の 8 月から 9 月中旬にかけて実施している。この実習が始まる前に幼児の理解、現場での人間関係や実際の仕事内容を実践的に深化させるために、空きコマ (1、2 時限) を活用して、4 月にシフト制で約 1 ヶ月間、本学園の柴田幼稚園で、新入園児のサポート活動を実施している。この活動を通して少しずつ園に慣れていく子どもたちの様子を目の当たりにすることにより、実習に対する学生の意欲向上に役立たせている。

また、幼稚園教員を目指す 4 年次学生には、10 月以降、園の行事 (音楽発表会、作品展、クリスマス会等) への手伝いを中心とした支援活動をシフト制で行っている。この活動は幼児の理解を深めることはもちろんのこと、教材づくりや環境整備をはじめ、幼稚園教諭としての幼児への関わり方なども実体験を通して深く学べる絶好の機会となるので、将来への心構えを確立する上で教育効果が高い。平成 21(2009)年度はインフルエンザの流行のため、一部活動が停滞したが、今後も一層キンダーガルテン・サポーター制度を充実し、教育実習や就職につながる実りある活動にしていくことにしている。

特記事項－ 11 県少年サポート (ボランティア) ピコット運動

平成 20(2008)年度より児童学科 4 年次の学生が、県警察本部より委嘱を受けて、小・中学生の万引き・薬物使用の防止や非行からの立ち直りのための支援活動「ピコット運動」を行っている。picot という名前の由来は、編み物やレース、リボン布などの端についている小さな輪の飾りをイメージしているが、少年サポートボランティアは、少年と社会のつなぎ目となることを目的としている。具体的な活動内容は、「非行少年や被害少年を継続的に支援し、再非行防止、立ち直り支援活動等の少年の健全育成のための活動」である。

平成 20(2008)年度は 2 人参加、このうち 1 人は東京都で開催された「全国少年警察学校ボランティア研修会」に青森県代表のパネリストとして参加した。また彼女の場合、平成 21(2009)年 3 月には、3 年間 (平成 19(2007)年～平成 21(2009)年) のボランティア活動の成果が、少年の非行防止に繋がったと認められ、警察ボランティア連絡会より表彰を受けた。地域新聞には、「学校と警察、地域が連携し犯罪のない安全、安心な町づくりに協力することの大切さを学んだ」という学生の意見が掲載された。この 2 人は、卒業と同時に幼

稚園教諭、あるいは小学校教諭として教育現場に立っているが、こうしたボランティア活動の経験は、教育現場での活力となり、また教育の幅を広げ、教師としての更なる意欲の喚起に繋がるものと考えている。

平成 21(2009)年度には、県警察本部より 3 人の児童学科 4 年次の学生が委嘱を受け活動した。そのうち 1 人は、これまでの経験を活かし、警察職員採用試験に挑戦し合格を果たした。平成 22(2010)年 4 月からは、少年補導職員として青森県内の警察署生活安全課に配属が決まっており、残りの 2 人は千葉県小学校教諭として活躍している。また本年度は、県警察本部より 3 人の学生が委嘱を受けている。

特記事項－ 1 2 高大連携キャリア形成支援事業への参加

標記の事業に、平成 20(2008)年度より、青森県教育委員会の依頼を受け、4 年生を中心に参加している。この事業は、本県の次代を担う高校生を対象に、年齢が少し上で親近感があり、頼もしい大学生の働きかけによって、高校生の心の中にある「やる気」を引き出し、目標に向かう意欲を喚起することをねらいとしているものである。

事業に参加するには、コミュニケーション等の研修を受けた者でなければならないが、本学学生は、家政・児童両学科に学び、将来、教員や栄養士等として「人」と関わる仕事に就くものが多いため、高校生自らの夢の実現に向かった主体的行動ができるようなキャリア形成支援にはかなりの影響を与えている。

平成 20(2008)年には県内 12 の研修協力校のうち 5 校を訪問し、ワークショップ等の企画に携わった。高校生にとっては年齢が少し上で親近感があり、頼もしい「ナナメの関係」である大学生からの経験談は身近なものとして良い影響を与えたとの評価を得ている。

また、活動後の学生の立場からみると、個人のコミュニケーション能力などのスキルアップにもつながっており、高校生と共に自分を見つめなおしたり、考えを模索したりするなど、自己啓発に役立ったという感想が多く見られた。

今後は参加学生が主体となって、学内での研修会を持つなどして、下学年のキャリア形成に役立てることにしている。

特記事項－ 1 3 献血活動における社会貢献

本学では、日本赤十字社からの協力依頼を受け、30 年以上も前から定期的に献血活動に協力してきた。献血の重要性を認識し、学生だけではなく、教職員も率先して献血に参加したことが認められ、青森県の血液不足解消に大きく貢献していると、これまで多くの感謝状を受けている。現在では、年 3 回(6 月、10 月、2 月)、大学に直接献血車が来て実施しており、事前に献血日時などのポスターを掲示し、当日は放送で学生に呼び掛けている。今後も、献血の協力は継続していく方針である。特に、低年次の学生には、献血の意味や価値・重要性について説明し、一人でも多くの学生が献血を通じて社会貢献できるように奨励していく。

東北女子大学

東北女子大学学生が参加している主なボランティア活動 (平成 21 年度実績)

取扱団体	活動内容	時期	参加人数
弘前市ボランティア支援センター	ボランティアデーへの参加	年 2 回	5 人
弘前市身体障害者福祉センター	自閉症児の長期、短期訓練の補助	長期休みの期間 (春、夏、冬休み)	延べ 20 人
日本盲導犬協会	盲導犬の普及ボランティア	年数回	4~5 人
青森県教育委員会	絵本の読み聞かせ:「子ども読書活動の推進」		6~7 人
青森県警察本部	ピコット運動		3 人位
青森県教育庁生涯学習	高大連携キャリア形成支援事業		15 人位
NPO 法人弘前こどもコミュニティ・ピープル	忍者修行大作戦	7 月	8 人
弘前市立図書館	図書館での絵本の読み聞かせ	月 1 回土曜日	7~8 人
弘前ひまわり会 (日本ダウン症協会支部)	ダウン症児の早期療育相談の会	月 1 回土曜日	7~8 人
	水泳教室	月 2 回	2 人
社会福祉法人弘前大清水学園	バザー・運動会・施設の祭りの手伝い		20 人位
弘前市弥生荘	ねふた運行と花火の夕べ、運動会の手伝い	夏休み	15 人
社会福祉法人弘前愛成園	児童養護施設での学習支援	年間をとおして継続	7~8 人
青森県自閉症協会	リフレッシュキャンプ (自閉症)	年 2 回くらい	3~4 人
教育実習先の小学校	スクールサポーター	週 1 回	
弘前市社会福祉協議会	桜祭り車いす応援隊	4 月中旬~5 月上旬	延べ 20 人